

ベルギー領コンゴの独立 ②

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

二つのコンゴの首都、ブラザヴィルとキンシャサは川を挟んで隣接しているので、テレビやラジオ放送を双方で受信することができる。現在、国内に2つのテレビ局しかないコンゴ（ブラザヴィル）と比較すると、人口が6千万人を超えるコンゴ民主共和国（キンシャサ）では多くのテレビ放送局がある。ラジオから聞こえるリンガラミュージックの多くはキンシャサの放送局からである。ただ、私が在任していた80年代は、モブツ大統領の独裁政権が全盛時代であり、放送も規制されていた。そのなかで、大統領を讃える映像は頻繁に放映されていた。

このモブツ大統領は、ベルギー人をはじめ多くの白人や黒人が犠牲となったいわゆる「コンゴ動乱」に終止符を打った「英雄」であり、また東西冷戦の状況下でアフリカにおける西側諸国の「砦」という役割が期待されていた人物だった。このコンゴ動乱を詳細に語るには紙面が足りないのので、ここではその大まかな出来事について追っていきたい。

コンゴ民主共和国は、1960年6月30日にベルギーから独立を果たしたものの、期待とは裏腹に黒人の生活は独立前と大きな変化はなかった。例えば、行政面ではベルギー人（白人）がそのままの立場で、コンゴ人（黒人）の「上位」に立っていた。その背景には、高等教育には力を注がれていなかったこともあり、コンゴ人で管理職を担えるようなエリートが少なかったことが影響していると思われる。また、レオポルド二世の専政にコンゴ政府が関与しなかったことの反省から、ベルギーが植民地行政に直接的に関わってきたことも無関係ではないだろう。それは軍隊でも同じで、独立後も白人将校が黒人兵士を指導監督する構図は変わらず、黒人兵士たちは不満を募らせていた。とくに、こうした社会の大きな変化のなかでは、さまざまな憶測や根も葉もない噂が飛び交い、そのなかには独立すれば「給料が倍になる」などといったものもあったようだ。

期待が大きいだけに、失望も大きくなったのだろう。武装手段を持つ一部の兵士たちが、白人に対して攻撃的となり、ベルギー人が避難する状況となっていった。コンゴ独立の立役者であり、独立後は首相として新政府の責任を担っていたパトリス・ルムンバは、こうした黒人兵士の要望に応えるべく、ベルギー人司令官の解任を決めるなどして、白人指導であった軍隊の黒人化を強行していく。このときに参謀総長に任命されたのが、後に独裁者となるジョセフ・モブツだった。

ルムンバのこうした急進的な姿勢にベルギー政府は猛反発する。自国民の安全確保を理由として、ベルギー軍を現地に派遣する事態となる。実際、ベルギー人に対する略奪や暴行事件は頻繁に起こっていた（この時の様子は、『コンゴ』〈石坂欣二著、二見書房、1961年〉に詳述されている）。植民地宗主国に対してもともと批判的であったルムンバは、ベルギーとの国交の断絶を宣言し、事態の解決を国連に委ねるのだった。こうした動きの一方で、ベルギーとは良好の仲であったカタンガ州のモイーズ・チョンベが、鉱山資源の豊富な南東部に位置するこの州の独立を宣言し、その臨時の大統領として自らが就任することになる。ベルギー政府もそれを水面下で支援していたようだ。ベルギー人の保護を理由として、軍隊をカタンガ州の首都エリザ

ベートヴィル（現在のルムンバシ）に出勤させた。とくに欧米資本で鉱山開発している「ユニオン・ミニエール社」といった会社もあり、ベルギー政府もその大株主であった。いずれにせよ、国の半分近い富を生み出すこの州の独立は、コンゴにとって大きな問題でもあり、そこに投資している国々にとっても決して放っておけない問題でもあった。

ルムンバから要請を受けた国連は、コンゴは「独立した一国家」であるとの上からベルギーの介入を非難した一方で、カタンガ州の問題は「内政問題」だと判断され、不介入となった。周辺国から集められた国連軍が治安回復のためにコンゴ国内に展開するとともにベルギー軍は撤退していくのだが、カタンガ州の状況は変わることはなかった。

カタンガ州を取り戻そうとするルムンバは、こうした状況を前にソ連からの援助を模索するようになるのだが、東西冷戦の最中のことでもあり、アメリカをはじめとする西側諸国から、彼は要注意人物として見なされていくことになる。さらに彼は、もともとさまざまな面で不一致だったものの、独立するというだけで手を組んでいたカサブ大統領とも衝突することになる。その結果、大統領と首相が双方お互いを更迭し、国全体がさらなる混乱に陥っていくのだった。

このような混乱のなか、ルムンバはチョンベ大統領の命令によって逮捕され、秘かに処刑されてしまう。そこにはルムンバによって参謀総長に任命されたモブツが、チョンベ側についたことも大きく影響しているようだ。またベルギー政府もこの暗殺計画に関与していたとも言われている。こうして、独立前には国民的英雄であったルムンバは、独立後のこの混乱のなかで、30年という短くも激動の生涯を終えるのだった。それはまた、コンゴが独立して1年すら経たない1961年1月のことだった。独立前後の彼の活動の様子は『ルムンバの叫び』（2000年）というタイトルで映画化されている。

ルムンバが亡くなったからといって混乱が収束したわけではない。カタンガ州の一方的な独立は、新生コンゴにとっては重大な問題であり、コンゴ大統領カサブとカタンガ州の暫定的大統領チョンベは対立していくのは必然的であった。それに加え、ルムンバ派の残党勢力は、共産圏の拡大を図るソ連の支援を受けてゲリラ活動を展開し、「コンゴの再独立」をスローガンに北東部の主要な都市を「解放」していくのだった。彼らは「ルムンバの水」と呼ばれる「魔法の水」を身体に振りかけることで銃弾が跳ね返るとされ、果敢に戦いに挑んでいった。英雄はしばしば神聖化されるのである。

フランスから独立したコンゴ共和国とベルギーから独立したコンゴ共和国（現在名はコンゴ民主共和国）。1960年には同名の国家が誕生したわけだが、かつてはどちらもコンゴ王国の領土であり、両国間には今のような国境があったわけではない。現在でも話されている言語は共通で、隣国のラジオ局から流れていくリンガラミュージックは、コンゴ・ブラザヴィルでも人気があり、そうした文化面では国境を感じさせない。しかし、この2国が辿ってきた歴史は大きく異なる。そこには、植民地化による分割や東西冷戦という世界的な動きが常に関与してきたのである。